

## 「混血」とは誰か？

—サン=ドマングの法律家モロー・ド・サン=メリーの  
「科学的」ディスクール—

Qui est « l'affranchi » ?

—Un discours « scientifique » de Moreau de Saint-Méry, juriste de  
Saint-Domingue—

大辻 都  
Miyako Otsuji

### 0. はじめに

18世紀末、啓蒙主義思想に後押しされるように勃発したフランス大革命で掲げられたのは「自由・平等・博愛」の理念だった。人権宣言に盛り込まれたこの精神が、今日共和国フランスが誇る普遍主義の礎となったことはよく知られている。しかしこうした新しい時代の精神が、革命後、多くの奴隷をかかえる海外の植民地にすんなりと伝播したわけではなかった。さまざまな要因から必然と思われた奴隷制廃止は、紆余曲折を経て半世紀後の1848年に施行されるが、現実にはつづく19世紀の共和制下において、普遍主義に基づく「劣った民」の「文明化の使命 (mission civilisatrice)」という名目のもと、フランスの植民地政策はピークを迎える。

1492年、コロンブスのアメリカ「発見」を機にヨーロッパ各国は競って入植を始め、アフリカから大量の奴隷を連行する。以来この地では、白人と黒人の共存と混血の歴史が育まれることとなる。かつてヨーロッパ人にとって黒人は恐怖の対象であり、奴隷の扱いを定めた「黒人法」も、白人と黒人の同衾を禁じていたが、植民地においては白人女性の不足などの原因から不可避免的に交わ

りを広げ、混血児は増加の一途をたどる。こうした混血児は奴隷の身分から解放されることがあり、「解放民」という新階級が形成される。

本稿で分析するサン=メリーの著作『サント・ドミンゴ島のフランス領地区における、地勢、生理、市民社会、政治、歴史についての記述』（1797）はこのような時代背景のもとで出版された大著であり、特に当地に暮らす人々を対象とした人種分類と特徴の記述は、その詳細さゆえ特筆に価する。後の遺伝学の発展を知る現代人の目に、サン=メリーの記述が科学的根拠を欠いていることは疑いないが、本稿の目的は怪物的ともいえる情熱をもって著者に肌色による人間の違いを分類させた植民者の、あるいはこの時代の意図を考えることにある。啓蒙主義の精神を引き継いだサン=メリーは著作において奴隷たちへの父性的な情愛を示しながらも、奴隷解放反対論者の立場を貫いた。詳細な分類をしつつ、あくまで「純粹」白人と黒い血の混じった者の間に優劣の線を引こうとする記述には、植民者にとって身内でもあり、安定した上下関係を脅かされる驚異でもある解放民へのアンビヴァレントな態度が見て取れる。本稿ではこのような一植民者の記述の中に、萌芽の時代の「自由・平等・博愛」精神がはらむ両義的な心性の具体例を探ってみたい。

ヨーロッパからの入植が始まってほどなく、旧大陸出身者にはその自然環境が驚きに他ならなかった新天地は、同時に人間集団という意味でも、過去にも世界のどの土地にも例を見ない特異性を形成していくこととなる。すなわち、一般に三角貿易と呼ばれる経済戦略のなか、アメリカ（北アメリカ、南アメリカ、カリブ海の島々）を拠点に展開された白人植民者たち、彼らが無償の労働力としてアフリカ各地から連行した黒人奴隷たち、そして「新大陸発見」後間もなくほぼ絶滅させられてしまう先住民たちの出会いと共存であ

り、出身地も肌色も大きく異なる彼らのあいだで不可避免的に混血が進むことにより、さらに複雑化した人口構成である<sup>1</sup>。

我先に新大陸に大農園を築き、利益を上げようとするヨーロッパ各国の競合において、フランスはイギリスなどと同様、後発組に属するといっている。ポルトガルやスペインが「発見」直後に入植し、先住民と対峙しつつタバコなどの生産を始めていたのに対し、フランスがアカディア（現在のカナダ・ケベック州）に初の植民地を築いたのは17世紀に入ってからであった。その後、フランスは北アメリカのルイジアナ、南アメリカのギユイアンヌや小アンティル諸島の島々などをアメリカにおける領土として獲得していくことになる。こうして植民地を広げる過程の初期には、ヨーロッパから移住してくる白人は必ずしも資本家層だけでなく、なかにはアメリカまでの船賃代わりに現地での労働を提供する期間限定の白人労働者や男性たちのパートナーとなるべく送り込まれた女性たちも含まれていた。しかし植民地（主にカリブ海沿岸地域）での主要産物が当初のタバコからより過酷な労働を必要とするインディゴや砂糖黍に移行すると、灼熱の地で北国育ちの白人労働者が耐えうる限度を超えてしまう。そこで新たに投入されたのがアフリカからの黒人奴隷であった。フランス植民地に最初の奴隷船が到着したのは1672年。以後、トータルで15万5000人の奴隷がフランス領アンティル諸島に連れてこられたとされる<sup>2</sup>。

最終的には農産物の売買で利益を得ることを目的とした奴隷貿易において、価値ある奴隷とは過重労働に耐えうる肉体的に頑健な奴隷のことであり、彼らは「黒檀の木 (bois d'ébène)」と呼ばれて高い値をつけられた。1685年に施行された「キリスト教の教化活動とアンティル諸島の奴隷の状態にかんする勅令」、通称、「黒人法 (Code Noir)」によれば、彼らは白人である農園主の「動産」と位置づけられ、すべてを管理される<sup>3</sup>。アビタシオンと呼ばれる大農園は主人を王とする小宇宙であり、奴隷たちは時に

は奴隷同士、家族関係を築きながらその内部のみで生活する。黒人法はカトリックの理念をもとにした法律であり、奴隷たちへのキリスト教教育を推奨するが、「動産」である以上、階級が異なるというよりそもそも階級の外にある奴隷たちと白人たちとの結婚はもちろん、同衾をも厳しく禁じていた。しかし祖国から遠く離れた熱帯の厳しい気候条件にあって、白人人口の男女比は著しく偏っており、白人女性が極端に不足しているという実情から来る欲求は、処罰を伴う法をもってしても押さえつけることができなかった。非合法な関係はさまざまに進行し、「混血児」という目に見えるかたちをとって表に現われるようになる。奴隷の解放は主人の裁量に任されているため、場合により主人の愛人である奴隷とその子供は解放されることがある<sup>4</sup>。このようにして混血児が次々と生まれ、さらに世代を重ねて混血が多様化し、同時に社会的には、「解放民 (affranchi)」という支配階級でも奴隷でもない新たな階層が出現した。

フランス領アンティル諸島の植民地のなかでも、イスパニオラ島 (サント・ドミンゴ島) の西三分の一を占めていたサン=ドマンガ (現在のハイチ) は奴隷貿易とアビタシオン経営において特に隆盛を極めていた。以下に分析する法律家モロー・ド・サン=メリーの『サント・ドミンゴ島のフランス領地区における、地勢、生理、市民社会、政治、歴史についての記述』は、大革命後間もない1797年に刊行された全三巻の大著であり、植民地時代の島の様子を知る上で貴重な資料となっている<sup>5</sup>。このテキストが特筆に値するのは、第一巻の前半部を占めている人口に関する記述である。ここでは上に概観したような植民地の住民、すなわち白人、解放民、奴隷が階級ごとに分類されるが、なかでも解放民の項目における13区分128通りに及ぶ混血分類の細緻さは多くの読者たちに驚きを与え、後世の多くの作家、歴史家が引用するところとなった。

さて、ここで問題にするのはサン=メリーの混血分類の科学的

真偽ではない。当時フランスは、16世紀以来の植民地政策が継続される一方、今なお世界に誇られる普遍主義の揺籃期を迎えるという矛盾と緊張をはらんだ時代に突入していた。サン=ドマングでは、フランス革命勃発の二年後の1791年、ブックマンらの奴隷反乱が起き、英雄トゥサン=ルヴェルチュールが立役者となるハイチ独立（1804）への道がつけられてゆく。さらに1793年、派遣委員ソントナクスが奴隷解放宣言を行い、翌年には国民公会で奴隷制廃止が決定される。しかしこの廃止案は1802年、ナポレオンにより覆されてしまうのである。サン=メリーの著書が刊行された1797年とは、その狭間にある流動的な時代であり、これを記述したのは、そのような時代背景に生きた植民地生まれの白人男性である。ここでは、サン=メリーが書き記した100ページ近くに及ぶ人種分類とその考察を見ていくことで、混血の有色人、あるいは解放民という新しい社会階層にどのような表象を与えようとしていたのか、そのようなディスクールが発動されるメカニズムは何かを知ることを当面の問題と考えることにしよう。

## 1. サン=メリーの混血分類

サン=メリーによれば、サン=ドマングの人口は執筆当時、52万人を数え、うち白人が4万人、解放民が2万8千人、そして奴隷が45万2千人だったという<sup>6</sup>。つまり、サン=ドマングがフランスの植民地として獲得された1697年からほぼ百年後の時点で、人口の8割以上を奴隷が占めていたということになる。サン=メリーは上に挙げた三つのグループを「肉体からほぼ識別できる」といい、この島の人口はこの「三つの階級」によって構成されているとした。

著作ではこの階級それぞれの特徴について、項目ごとに説明がなされるのだが、サン=メリーがここで「白人 (Blancs)」「奴隷 (Esclaves)」「解放民 (Affranchis)」という用語のもとに分類していることに着目したい。なぜなら「白人」は肌の色で区別される人

間のグループである以上、「白人」の別項は「黒人」や「黄色人」であるべきだし、社会における状態を示している「奴隷」や「解放民」には「支配層」や「主人」といった語が対置されるのが自然だと思うからである。しかし、分類された各項の説明を読んでいくと、これらが身体であれ社会的役割であれ、何か統一した基準をもって語られた文章ではないということに気づかされる。あるいは統一した基準のもとにそれぞれの項目の特徴を書き記そうと意図しながら、結果的には位相の異なるディスクールが生み出されてしまったというべきかもしれない。

項目ごとに割かれるページ数は、「白人」が9ページ、「奴隷」が39ページ、そして「解放民」が27ページとなっている。「白人」の項はさらに「ヨーロッパ人」「クレオール男性」「クレオール女性」に分かれ、そこで中心的に論じられるのは、熱帯の植民地に生まれ育った白人たち、特に女性たちの怠惰で性的に放縦な気質である。

一方、「奴隷」の項の中心的话题は、アフリカ大陸での彼らの出身地による細分類と身体的・気質的な特徴であり、その言説のタイプから、むしろこの項こそ「奴隷」より「黒人」としたほうがよいのではと思わされる。さらに説明は、食生活などの習慣や音楽やダンスに対する才能、そして彼らが信仰するヴードゥー教の儀式の詳細な記述へと移っていく。この項目の冒頭でサン＝メリーは、本来彼らは「階級」をなすものではないが、と断っているが<sup>7</sup>、それでも記述に値するのは、次に記述されるもうひとつの階級である「解放民」は奴隷と白人より成り立っているからだと言明している。

さて、最後に置かれた「解放民」の項こそ、多くの読者の注目を惹き、百科事典に引用されもすれば、ヴィクトル・ユゴーからエメ・セゼールまで、作家たちが懐疑からであれ何であれ作品に取り入れずにはいられなかった問題の記述である<sup>8</sup>。一番目と二番

目のグループが、それぞれ「社会学的」とも「地理学的」ともいえる方法で分類されていたとすれば、最後のこの「解放民」のグループは、いわば「遺伝学的」な方法をとって分類されていると  
 いう。 「解放民」という社会的身分の名で区分されながら、ここで問題にされるのは、混血の組み合わせとその度合いによる階層化である。 調べてみれば128種類におよぶ混血「全種類」の記述であり、ここでは「純粋白人」と「純粋黒人」を両極とし、両親それぞれの「血」のかけ合わせにより生まれる人間の混血度が段階ごとに命名され、作表化されているのである。

混血表はさまざまな分類方法により、15ページにも渡って続き、コメントが加えられている。階層化による命名などは多くの文献に引用されているが、ここではサン=メリーの分類やコメントについても見ていくことにしよう。

まず、サン=メリーは「解放民」すなわち「有色人 (Gens-de-Couleur)」「混血 (Sang-mêlés)」を13の等級に分けられるとし、各等級をたとえば以下のように階層化している。

I  
白人との組み合わせ

白人男性と	黒人女性Négresseから	ミュラートルMulâtreが生まれる
	ミュラートレスMulâtresseから	キャルトロンQuarteronが生まれる
	キャルトロンヌQuarteronneから	メティMétisが生まれる
	メティヴMétiveから	マムルークMamelouqueが生まれる
	マムルークMamelouqueから	キャルトロネQuarteronnéが生まれる
	キャルトロネQuarteronnéから	サン・メレSang-mêléが生まれる
	サン・メレSang-mêléから	サン・メレが生まれる 徐々に白人に近づいていく
	マラブーMarabouから	キャルトロンQuarteronが生まれる
	グリフォンヌGriffonneから	キャルトロンQuarteronが生まれる
	サカトラSacatraから	キャルトロンQuarteronが生まれる

## Ⅱ 黒人との組み合わせ

黒人男性と	白人女性から	ミュラートルが生まれる
	サン・メレから	ミュラートルが生まれる
	キャルトロネから	ミュラートルが生まれる
	マムルークから	ミュラートルが生まれる
	メティヴから	ミュラートルが生まれる
	キャルトロンヌから	マラブーが生まれる
	ミュラートレスから	グリフが生まれる
	マラブーから	グリフが生まれる
	グリフォンヌから	サカトラが生まれる
	サカトラから	サカトラが生まれる

## Ⅲ ミュラートルとの組み合わせ

ミュラートルと	白人女性から	キャルトロンが生まれる
	サン・メレから	キャルトロンが生まれる
	キャルトロネから	キャルトロンが生まれる
	マムルークから	キャルトロンが生まれる
	メティヴから	キャルトロンが生まれる
	キャルトロンヌから	キャルトロンが生まれる
	マラブーから	ミュラートルが生まれる
	グリフォンヌから	マラブーが生まれる
	サカトラから	マラブーが生まれる
	黒人女性から	グリフが生まれる

上のように、「純粋な」白人から「純粋な」黒人までの各階層に属する一人の男性を軸に取り、この男性とかけ合わせ可能な女性の組み合わせを示す表が13通り展開されてゆく。

ミュラートル／ミュラートレス(以下、後者は女性を指す)とは、白人と黒人の割合がそれぞれ1/2ずつの者を指し、以下、キャルトロン／キャルトロンヌは黒人の血が1/4、メティ／メティヴは



1/8、マムルークは1/16、キャルトロネは1/32、サン・メレは1/64混じっていることを示しているが、最後のサン・メレに関しては、これ以上混血が進んだとしてもサン・メレの呼称を取る。この分類には以下のようなコメントが添えられている。キャルトロン、メティ、マムルークは白人以上に日差しに弱く、シミができやすい。メティは特に虚弱なため、子供をあまり産まないという。マムルークの肌は白いが、つやがなく黄ばんでいるため、白人とは間違いようがない。総じていえば、キャルトロン以降の有色人には退化が見られるというのである<sup>9</sup>。

また、マラブー、グリフォン/グリフォンヌ、サカトラとは、ミュラートルと黒人の間に位置づけられるグループであり、上に示された階層の延長にはないため、「側系(latérale)」と呼ばれる<sup>10</sup>。

この中でサン=メリーは、マムルークを生み出すかけ合わせのグループには「1/16黒人の血が混じる者までしか」存在せず、マムルークとマムルークのかけ合わせの例については「四人しかない」と報告している。そして、これらの分類表を掲げるにあたって、サン=メリーは何の典拠となる資料も学者の名も示していない。

それではこうした膨大な混血分類表を作成し、遺伝学者めいた説を唱えるモロー・ド・サン=メリーとはいったい何者だったのか、私たちはいま少し知っておく必要がある。

メデリック・ルイ・エリー・モロー・ド・サン=メリーは1750年、マルティニーク島のフォール・ロワイヤル（現在のフォール・ド・フランス）に生まれ、1819年にパリで没した。やはり同じ島で砂糖黍農園を経営する貴族タシェ・ド・パジュリ家の娘マリー・ジョゼフ・ローズ、すなわち後のナポレオン后妃ジョゼフィーヌは遠縁にあたり、ナポレオンに冷遇された晩年には、パリで彼女の援助を受けることになる。

19歳でパリに渡り、法学、ラテン語、数学、天文学を学んだ後、

再びアンティル諸島に戻り、農業を専門とする法律家としてサン＝ドマングに着任する。以後、十数年をこの島で過ごす。革命期には再びパリに滞在、ロベスピエールの不興を買ってギロチンにかけられるすんでのところ北米に亡命し、ニューヨークで書店業などをする傍ら、97年にアメリカ合衆国で本書を刊行する<sup>11</sup>。要するにサン＝メリーはプロフェッショナルの科学者ではなく、奴隷制度に関しては、これを擁護する立場にあったとされる法律の専門家である<sup>12</sup>。しかし、人生の大半をアンティルの植民地で送り、混血の人々や黒人奴隷を身近に見て過ごしたことは確かだ。マムルーク同士のかけ合わせが四例しかないといった上の記述などから類推するに、サン＝メリーは現地での観察に基づく経験主義を拠り所に、この膨大な表を作り上げたのではないかと考えられる。

## 2. 超えられない深淵——黒い血と「青い血」のあいだ

混血の度合いを示す呼称については、他の学者による著作にも見られないわけではない。啓蒙主義全盛だった当時、百科全書派を代表する自然科学者ビュフォンも、別の著作の引用と断りながら、混血の分類について若干の記述を残している<sup>13</sup>。

1. 黒人男性と白人女性からは、直毛で半分白い肌のミュラートル  
[が生まれる]
2. ミュラートル男性と白人女性からは、直毛で褐色肌のキャルトロン
3. キャルトロンと白人女性からは、キャルトロンほど褐色でない肌のオクタヴォン
4. オクタヴォンと白人女性からは、完全に白い肌の子供  
**白人に黒が混じっていく逆向きの系列**
  1. 白人男性と黒人女性からは、直毛のミュラートル
  2. ミュラートルと黒人女性からは、3/4黒く、1/4白いキャルトロン

3. キャルトロンと黒人女性からは、7/8黒く、1/8白いオクタヴォン
4. オクタヴォンと黒人女性からは、髪は縮れた本物の黒人

しかし、ビュフォンはP氏なる人物のこの分類に対し、根拠がないとして懐疑的であり、続いて1724年に発行された「科学アカデミーの歴史」の記述を紹介している。

同じ割合の白人男性と黒人女性、黒人男性と白人女性から生まれる子供の肌が黄色く、髪は黒くて短く縮れており、これがミュラートルと呼ばれることは周知の通りである。ミュラートルと黒人女性、あるいはミュラートルと黒人男性の子供はグリフと呼ばれ、より黒っぽい黄色の肌で髪は黒いが、ミュラートルと黒人をもとに生まれる人々は、完全な黒人に回帰するようにも見える。ミュラートルとミュラートルの子供はカスクと呼ばれ、グリフより明るい黄色の肌で、はっきりとミュラートル同士から生まれ、白人に回帰する人々とわかる<sup>14</sup>。

ビュフォンが紹介した分類の段階はサン=メリーのそれより大まかだが、混血を表す呼称についてはサン=メリーの著作以前から、フランス本国にも知れ渡っていたことが窺える。だが「このような重要テーマに十分な資料がないのは遺憾」とビュフォンに言わしめた当該テーマに関して、サン=メリーの「科学的」分類は本国の専門家顔負けの緻密さをもって展開されてゆく。

さらにサン=メリーは、混血人が合計「128の部分」より構成されているとの仮定にこだわり、かけ合わせによる白黒それぞれの割合を算出してみせるのである。

冒頭にも述べたように、ここではサン=メリーの科学的な確か

## I ミュラートル

	白	黒
サカトラと黒人女性	8	120
サカトラとサカトラ	16	112
グリフと黒人女性	16	112

## II グリフ

	白	黒
マラブーとサカトラ	32	96
グリフとグリフォンヌ	32	96
黒人男性とミュラートル	32	96
黒人男性とマラブー	24	104
グリフとサカトラ	24	104

[…]

## IV ミュラートル

	白	黒
キャルトロネとサカトラ	70	58
マムルークとサカトラ	68	60
白人男性とミュラートル	64	64
メティとサカトラ	64	64
キャルトロンとグリフォンヌ	64	64
ミュラートルとミュラートル	64	64
サン・メレと黒人女性	63	65
キャルトロネと黒人女性	62	66
マムルークと黒人女性	60	68
メティと黒人女性	56	72
キャルトロンとサカトラ	56	72
ミュラートルとマラブー	56	72

[…]

さを問題にしているのではない。彼がこの分類を試みたのは、優性遺伝や分離の法則など、メンデルの遺伝学の難解で入り組んだ法則が世間に受け容れられた時期より一世紀も遡った時代のことなのである。

遺伝子や染色体の複雑な構成や伝達を知らなかったサン=メリーは、「混血」をその言葉の示す通り、「血」の表象で考えた。人種や遺伝の問題を血液でイメージするのは、何もサン=メリーに限ったことではない。「純血 (pureté de sang)」「混血 (sang-mêlé)」といった表現はフランス語でも、また日本語でも頻繁に使われ、異なる種との交わりがない高貴な家系の出身者は、フランス語では「青い血 (sang bleu)」と呼ばれてきた。

「青い血」でないにしても、サン=メリーは「純粋な白人」と「純粋な黒人」という二つの極を設定し、混血の組み合わせによって「黒」と「白」の部分とが均等に分割され、受け継がれていくと考えていたようである。この「部分」は合計を128と仮定す

るが、そう考える根拠は示されていない。植民地化されてほぼ百年経ち、また女子の出産年齢が相当に早く、十代の半ばから始まるサン=ドマングでの世代交代を計算してみれば、ちょうどサン・メレが子供を産むあたり、すなわち白人男性とのかけ合わせで考えるなら1/128黒人あたりが限度だといえなくもない。あるいはサン・メレ以降は、目に見える識別が不可能とされていたのかもしれない。どのみち、サン・メレ以降はどこまで行ってもそれ以外の呼称は用意されていないのである<sup>15</sup>。

いずれにしても、ダーウィンの進化論に基づくポリジェニスト(人類複数起源論者)が未だ出現しておらず、人類の祖は唯一のカップルであるとするモノジェニスト(人類単一起源論者)が主流派だった時代背景を考えた時<sup>16</sup>、サン=メリーがいう黒人とも同じ先祖を持つはずの白人の「純粋さ」には説得力がないように思われる。しかし、ここで重要なのは、いわば白人と黒人のゼロ度といったものが想定されていること、そして「混血」とは「黒人」と、「白人と比較した時、知覚しうるいかなる差異も顕示しないような肌色の者」<sup>17</sup>の間にある者だということである。サン=メリーによれば、二、三世代、混血を繰り返し、肌の色がしだいに白くなっていても、その後の世代で再びアフリカ人の特徴が出てくることもあるという<sup>18</sup>。128部分中、8以上白人の部分を持っていないくは「解放民」のカテゴリーには入れられず、それ未満は「黒人」と呼称される。一方、黒人の部分はそれが1未満になり、どれほど接近するにせよ、その部分が存在するかぎり「白人」ではない。要するに、決して踏み越えることのできない大きな深淵が、白人とそれ以外との間には横たわっているということである。

現代の私たちから見れば、サン=メリーの分類はフィクション以外の何物でもないが、彼自身、この算出にはかけ合わせによる誤差が伴い、おのこの混血グループの「部分」はあくまで便宜的に設定した基準値に基づくものだと告白している。こうした誤

差の最大値と最小値が無視されていることにより、分類表で下の階層に位置づけられたグループの者が、実際は上のグループの者より肌の色が明るいという逆転現象もありうるとサン=メリーは説明している。また、気候条件によっても肌の色は変わるという。各階層を区分する表面上の要素は肌色だけでなく、髪が縮れているか直毛かなども含まれる。白人に近いほど頭脳は優れ、黒人は体力があるものとされるが、ある程度混血の段階が進むと、前述したように「純粹白人」以上に肌が日差しに弱かったり、体力がないため子孫を増やせない階層が観察されている。そしてさらに混血が進んで極に近づくと、再び身体的な強さを取り戻すというのである。サン=メリーによれば、「純粹」白人と黒い部分のごくわずかしかないとされる混血人とは肉眼では見分けがたく、口述などでこの土地に残る「伝承」に頼ることが必要なのだという<sup>19</sup>。

植民地建設以来、これら異郷の風土や住民について書き記した航海家、宣教師、歴史家は数多くいるが、書き手としてのサン=メリーの信用度は高いようだ。サン=メリーより前の時代には、布教のためアンティルに移り住んだテルトル神父、ラバ神父といった人物が多くの記事を残しているが、キリスト教を説くはずが「野蛮人」の信じる悪霊と一緒に信じ、オウムを好んで貪り食い、黒人たちを助ける一方、奴隷を鞭打ちにするなど残虐な一面も持つ、ピカレスク小説の主人公めいた怪人であるラバ神父などに比べ、徹底した観察に基づいたサン=メリーの記述は、ずっと良識的で理性的であるように見受けられる。

サン=メリーの混血分類は、彼のそもそもの分類用語に戻れば「解放民」である人々がそれほどまでに増え、広がったことを示唆してもいる。サン=メリーが徹底した観察を基礎に置く手法を採用できたのは、混血の世代交代がじゅうぶんな期間繰り返され、ある程度「客観的」な結果を導くだけのサンプリングができるよ

うになったということだろう。

著作中、2万8000人と報告されている解放民は、18世紀初めには500人に過ぎなかった<sup>20</sup>。この新しい階級の人口が百年足らずで50倍にも膨れ上がる過程には、フランス本国による法的規制と植民地の内部事情それぞれの変化があった。その上どちらも表面的な態度の裏に思惑が錯綜しており、人口増加はこうしたあらゆる要因の駆け引きの結果だといえる。

冒頭の疑問に戻れば、サン=メリーは「白人」「解放民」「奴隷」という奇妙な分類呼称を使った。本文中では「解放民」は「混血」、「奴隷」は「黒人」と言い換えられている場合もあるが、「白人」はつねに「白人」と名指される。つまり「白人」とは肌や髪の色といった身体的特徴で区別される人々であるだけでなく、あらかじめ特権を持った社会的身分の呼称として使われているのである<sup>21</sup>。そして、サン=メリーが数十ページに及ぶ分類表を提示しながら説得を試みたように、黒人と白人の間には決定的な深淵が横たわっている。それではなぜ、本来踏み越えてはいけなかったはずの深淵が現実の行為としては踏み越えられ、大量の「混血児」という目に見える存在として表れてしまったのか、そのメカニズムと心理の変化を考察してみたいと思う。

### 3. タブーと掟破り

カリブ海の島々で先住民と遭遇したヨーロッパの入植者たちは、たびたび彼らに攻撃を仕かけ、やがて金を採掘するための鉱夫として過酷な労働を強いるようになる。当初、30万人いたといわれる先住民は百年足らずのうちにほぼ絶滅してしまう。金採掘に代わって、タバコや綿花の栽培が主となると、「契約労働者 (engagé)」「36ヶ月 (trente-six-mois)」などと呼ばれる白人労働者が投入されるが、間もなくアフリカ大陸から大量の黒人奴隷が連行されるのは、冒頭に書いた通りである。

「人喰い」との噂が広まっていたカリブ人を含む先住民に続き、黒人奴隷たちもまた、ヨーロッパ人にとっては完全な他者であった。自らの持つ人間としての権利を初めから認めていないのだから、「他者」以下だったといえるかもしれない。

マリーズ・コンデは論考『ボサルの文明』において、植民地時代に発展した黒人奴隷の口承文学についての考察をしているが、その序章では入植者たちによる奴隷のイメージが分析されている。「不幸なことに黒人は、インディオの揺り籠たるこの極楽めいた自然（彼らはそこで自由に誇り高くふるまえるのだ）の一部ではない。黒人は闖入者であり、ある場所のただなかへと連れてこられた要素であり、この場所を悪臭と野卑とで汚染しかねないのである」<sup>22</sup>。コンデはまた、19世紀にマルティニーク島を訪れたフランス人による、黒人の発散する糖蜜（砂糖黍の精製段階で出る）と塩漬け鱈の吐き気を催す匂いの記述を引き、こうした蓄積から「いわば黒人のステレオタイプがかたちを成し、航海文学のなかに強固に根づくことになった」と述べている<sup>23</sup>。

アルレット・ゴージェもまた、黒人と出会った初期における白人の側の嫌悪感について詳細に分析している。

黒人たちとの最初の出会いは、深い恐怖を喚起した。リヨン出身の白人奴隷コピエは、1645年にこう書いている。「黒人の不完全さの数々をここに列挙してお目につけねばなるまい。まず彼らは恐ろしくいびつだ。第一に彼らの目は燃えた炭みたいに光っている。まるで淫蕩な盆だ。髪は男も女もひどく短く、自然に冠状になっているけれど、猪の頭だってあれほどは硬くない。鼻は低くつぶれて、分厚い唇の上に垂れ下がり、顔の残りの部分はあまりにひど過ぎて、恐怖と驚きなくしては見ることも、また聞くこともできないほどだ。というのは、彼らの声は牡牛の吼え声にそっくりだからだ。それに、彼らの手は鉄床



やキュクロプスの金槌と同じくらい固い。彼らの栄光はその肌を剃刀で切られる時にある。その額や頬に傷がつくことはないのだから」。同様に1655年、ジェズイット派のペルプラは、アフリカ人の容貌に耐えるため、キリストの慈悲を求めたほどだ。「彼らが裸同然で船から出てきた時、彼らは恐怖と哀れみを催させた。その光景は、地獄から出てきた悪魔のようだが、神の御子の血によって償われた魂でもあるようだった」<sup>24</sup>。

黒人の容姿に特徴的な「獅子鼻と分厚い唇」は、白人の美的感覚に拒否反応を起こさせた。サン＝メリーは、こうした形態の鼻のせいで、黒人たちは嗅覚が劣り、鼻の病気にかかりやすいと主張している。また植民地に生まれた黒人の子は、身体、教育、食事などの条件をアフリカの黒人の子と同じにしても、世代ごと鼻が高く、唇は薄く、整っていくという。「クレオール黒人たちは白人に似たこの特徴を鼻にかけ、優っていると思って自慢したが」<sup>25</sup>。1688年、イギリスの女流作家アフラ・ベーンは、その作品でオルコノコという名の高貴な黒人ヒーローを生み出したが、勇敢なこの登場人物の鼻はローマ風にすっきりと高かった。そうしなければヨーロッパ人読者の共感を得ることなどできなかったのである<sup>26</sup>。だがそれ以上に、ゴージェもコンデと同じく、白人の黒人に対する嫌悪感の源泉が「黒さ」と「腐肉のように臭い」その「匂い」にあると見ている。

さらに、黒人法の詳細な条項研究を記したルイ・サラ＝モランは、白人とは異なり、黒人の精液は黒いという、古代からの風説を紹介している。「ヘロドトスは、黒人の精液は、きわめて美しくつやのある白い色をした白人のそれとは違い、彼らの肌のような黒い色をしていると語り（彼はそれを見たことがあり、知っているというのだ）、神の呪いがエチオピア人の肉体そしてネグリチュードのあらゆる源泉へと及んだと確信する立場に加担するこ

とになったのである」<sup>27</sup>。

このように黒人すなわちイメージとしての邪悪に対する嫌悪感  
は、出会いの前からすでに準備されていたのである。そして実際、  
白人たちが目の当たりにすることになった黒人は、その先入観を  
裏切るものではなかった。邪悪なイメージは白人たちの視覚、嗅  
覚、聴覚、触覚などを動員することで現実のものとなり、それと  
同じ空間に身を接することの恐怖が育まれていったのではないだ  
ろうか。

フランスで奴隷解放が実施されたのは1848年。他のヨーロッパ  
の国々でも、これと前後する時期に行われている。だが一方で、  
19世紀後半になっても、白人種の知能の他人種に対する絶対的優  
位は、「科学的事実」として人々の共通了解とされていた。ヘー  
ゲル、ヒューム、ルナンといった知の功労者でさえ、その常識を  
前提として議論を進めている。奴隷に対する植民者の非人道的な  
扱いには批判的だったにもかかわらず、啓蒙主義者ヴォルテール  
などは、黒人を「猿との境を見分けるのが難しい」としていたほ  
どである<sup>28</sup>。

古代から近代までの長い歴史に裏づけられたこのような人種認  
識のもと、植民地時代の公権力は奴隷と主人の性的接触を法律の  
文書をもって禁じた<sup>29</sup>。

1685年に施行された黒人法のなかには、自由な身分にある者と  
奴隷間の出産を禁じ、罰則を定めた条例がある<sup>30</sup>。

第9条 奴隷との同棲関係で一人もしくは複数の子をなし、主  
人に損害を与えた自由人は、砂糖2000リーヴルの賠償  
を請求される。またその者が、当該の子供をもうけた  
奴隷の主人であった場合は、賠償に加え、奴隷とその  
子供たちは剥奪、施療院に没収され、彼らは生涯自由

の身になることはできない。しかしながらその自由人が、その奴隷との同棲期間、別のどの人物とも婚姻関係を持たずにいた場合はそのかぎりでない。彼は教会の指導する形式に則って当該の奴隷と結婚し、この方法によって奴隷は解放され、奴隷たち〔奴隷である母親の子供たち：引用者付記〕は自由で合法の身になることができる<sup>31</sup>。

これに対し、1724年に出された改訂版の同じ条項には、重大な変更が施された。「白人と黒人の婚姻関係はこれを禁ずる」<sup>32</sup>というのである。法を破った場合の賠償額は物納でなく300リーヴルに変えられている<sup>33</sup>。さらに白人と黒人との結婚禁止を裏づけるかたちで、1685年版の末尾の部分、「しかしながら、その自由人が」以下は、「しかしながら、解放された、もしくは自由な黒人が」と変更され、人種間の接触じたいを認めないということが強調されている。

しかし、こうした法規制の強化と反比例するようにして、白人と黒人の交渉から生まれる混血児は増加の一途をたどる。サン＝ドマングにおける白人に対する解放民の割合が、1681年には4,84%だったのが、1754年には33,95%、1789年には89,36%にまで上っていることが、それを裏づけているだろう<sup>34</sup>。

当初、邪悪の象徴と恐れていた黒人と、白人はどのように接触を深めていったのか？

前にも書いたが、入植した白人男性に対して、白人女性の数は圧倒的に不足していた。マルティニーク島での人口を例に取れば、1665年には、2182人の白人男性に対し女性は726人、1671年には、2487人に対し656人、1688年には、1370人に対し551人、サン＝ドマングでも、1681年の男女比が、3463人対435人との調査記録がある<sup>35</sup>。彼らの肉体的欲求が、自然、黒人女性たちへと向かった

のも想像に難くない。

17世紀末、アンティル諸島に暮らしたラバ神父は、その大著『島々への旅』において、異人種間結婚の実例を二組だけ見たと記している。その一例の白人の夫は、同胞たちから辱めを受け、結局、黒人妻を離縁してしまったという<sup>36</sup>。だが、18世紀になると、異人種間の交渉はますます増加していく。それから約一世紀の後、サン＝メリーは、「暑い気候が欲望を刺激し、簡単に実現」してしまう、非合法でモラルに反するこうした交渉を、「必要悪」という言葉で表現した。さらにそうした情交関係から生まれる主人たちの奴隷に対する弱さが、奴隷制が緩和される要因にもなっていると分析している<sup>37</sup>。また、カリブ海を荒らす海賊らの黒人女性への嗜好についても触れている<sup>38</sup>。アルレット・ゴージェは、デュ・テルトル神父やシャンヴァロンといった人々の、以下のような証言を引いている。「罪深き炎を消すはずと思われる恐ろしい顔の黒さや耐え難い匂いにも関わらず、黒人女たちを愛してしまう我らがフランス人のある者たちにおける野放図な情熱ほど、『恋は盲目』の諺を証明できるものはないだろう」<sup>39</sup>。「我らが人種の男性がもつ退廃した趣味には、たぶん驚かれることだろう。だが、そうしたチャンスとその簡便さ、気候環境、習慣——たとえば白人女たちの無関心と高慢さ、男たちを喜ばせようという気遣いのなさといった——、また、この新世界におけるヨーロッパ人たちの面白半分の動機や、彼らに随行する女性の欠乏といったものに導かれるのならば、初期の植民地では恐らく普通のことなのである」<sup>40</sup>。そしてゴージェは次のように結論づけている。「宗教も政治も、果てない欲望に屈してしまう本能によるこの接触到抗おうとはしてみたが、無駄だったのだ…」。

#### 4. セクシズムとしての分類と解放民の増加

ところでセクシズムと人種主義を切り離して考えることはできな

い。それは両者が互いに類似した差別構造を持っているからだけでなく、エティエンヌ・バリバールが「相互補完的な排除と支配の歴史システム」というように、もとより人種主義が性差別主義を前提とみなし、両者が同時並行的に機能していることを意味する<sup>41</sup>。

そもそもプランテーションにおいて、女性奴隷の母性は、その経済的側面から尊重されていた。つまり女性奴隷が子供を産めば、その子供が新たな無償の奴隷となるという仕組みである。そのため主人たちは奴隷間の若年からの「結婚」を奨励し、1680年には国王ルイ14世自身が、キリスト教の名のもとに奴隷の再生産を支持した記録もある<sup>42</sup>。こうした傾向に拍車がかかり、中には自らの地所には女性奴隷しか置かず、よその男性奴隷に「種馬」として金を払って子供を産ませ、その子供たちさえ女性しか望まなかった主人たちもいたという。「奴隷たちはこのように、別の奴隷を生産するための機械のように使用されたのである」<sup>43</sup>。

大事な「動産」である子供を死なせた母親には、厳しい罰が与えられた。妊娠した時は報告が義務づけられ、流産などにより子供が生まれなかったり、墮胎が見つかった場合、母親は鞭打たれ、再び妊娠するまで鉄の首輪を嵌められ続けることもあったという。

黒人法の規定では、黒人の子供の身分は母親の身分に準じることに決められていたから、奴隷女性の子は父親の肌が何色であろうと奴隷である。だが、奴隷の主人には、自らの奴隷を解放民として解放する権利が与えられていた。奴隷女性たちは「動産」である以上、主人のほうから性関係を求められれば拒む術はなかったが、サン=メリーがいうようにそうした非対称な関係の中、自分と子との運命が改善されることを願って、白人と交渉を持つことがあったとしても不思議はない<sup>44</sup>。

奴隷たちがポリガミーの風習を持つことは、白人たちの嫌悪と軽蔑の対象だったが、同時にそれに伴う黒人女性の多産と母性は彼らに強く印象づけられていたようである。サン=メリーは、筋

肉の発達した黒人女性にとって出産は簡単な行為であるとし、その類まれな母性のために乳房を犠牲にしてしまうため、胸が美しい黒人女性は皆無だと記している<sup>45</sup>。またサン=メリーは、少なからぬ黒人女性と交わり、5、6人の混血嫡子を持つ白人男性の例も挙げている。19世紀ラールス事典の「遺伝」の項目には、隣同士に住む農園主が互いの奴隷を交換し、それぞれ性交渉を持った例が紹介されている。彼らは純粋な黒人奴隷よりもミュラートルのほうが働き手として優れていると考え、ミュラートル増産を目論んだのだが、それぞれ自分の奴隷に手を出すのはためらわれたので、よその奴隷を借りてきたというわけである<sup>46</sup>。

女性を母親か娼婦の択一で考える二元論はよく聞かれるが、プランテーションの黒人女性と「母」の記号が切り離せない一方で、白人支配層と黒人奴隷との交渉から生まれた女性、ミュラートルスには娼婦のそれがつきまとう。黒人女性については、上にも紹介した母性の強さや、嫉妬深さ、迷信深さなどに触れながら、時にサン=メリーは、彼女たちが白人より手ひどい扱いをする黒人男性に惹かれる理不尽さを訝ったりもする。一方、混血女性、白人だが島育ちのクレオール女性に対しては、その怠惰で恋愛好きな性格が語られ、*volupté, séduisante, précoce, langueur, indolence, désœuvrement, jalousie*（性的快楽、誘惑的な、早熟、ものうげ、怠惰、無為、嫉妬）といった単語が繰り返し使われる。そして白人男性の本妻と愛人といった関係になることの多いクレオール女性と混血女性はライバル視し合う傾向にあり、互いに嫉妬しつつ模倣し合っているのだという<sup>47</sup>。彼がここで使う表象は、フランス小説に登場する情熱的で誘惑的な南国女性のイメージを寸分裏切るものではない。たとえば、混血女性については以下のように書かれている。「腰を揺らし、頭を振りながらのゆったりした歩み、ハンカチを手にからだに沿って動く腕、歯磨き代わりに小ぶりの根っこでいつもぴかぴかのきれいな歯といったものに、ヴィ

一ナスの巫女の姿を見るだろう」<sup>48</sup>。だがサン=メリーの描写はさらに詳しく、混血女性の経済観念、奴隷の扱い、また早熟で若いうちから性交渉を繰り返すため出産できなくなるケースが多いといったことが語られ、こうした墮落を嘆かわしく思う気持ちが吐露されている<sup>49</sup>。

サン=メリーによる「白人クレオール」「奴隷」「解放民」の各項目は、割かれるページ数も観察の位相もばらばらだが、いずれも女性についての観察に重点が置かれていることは注目に値する。自分にとって他者である度合いが強いほど、観察に熱が入る心理の表れだろうか。彼は、黒人女性が一緒にいれば特典が多いはずの白人男性より、黒人男性に惹かれてしまう性向をもつことに不満の混じったコメントを述べている。「彼女たちは少しのあいだは葛藤しつつも必ず最後に優ってしまうこの性向を多少楽しげに隠し、何かの機会の折、公衆の前で選択せねばならない時にも黒人男を選んでしまい、そのことで自分と白人との関係を壊してしまうのである」。そして「考えや言語が似ており、身分も変わらず、恋愛の魅力などこれっぽっちもないが、馴れ合いにより結局そこに行き着いてしまうことがこの傾向の主な原因であり、それは未開人ふうの躰により拍車がかかる」と分析する<sup>50</sup>。キューバの現代作家、アレホ・カルペンティエルによる、建国前夜のハイチを舞台にした小説『この世の王国』に脇役として登場するサン=メリーが「赤ら顔で見るからに好色そうな」<sup>51</sup>と形容されているのは、あちこちにモラルを書き加えては見るものの、それ以前の女性描写の細かさに書き手の熱意が読み取られてしまうからかもしれない。

18世紀後半に発行された「百科全書」によれば、「解放民 (affranchi)」とはラテン語のlibertinusと同義であり、「解放により自由な身分になった新しい市民」を意味する。ここでは以下のよ

うな説明がなされている。彼らは、解放されてはいるが、元主人に対する義務を免れるわけではない。求められれば奉仕しなければならないし、奉仕を怠ったり、元主人への態度が悪かった場合、あるいは主人の不利になるような偽証をした場合、投獄されるという。また、解放民は、元主人の母親、未亡人、娘と結婚することは許されない。解放民の子供は、もはやこの名を名乗らなくてもよく、生まれながらに自由な市民である。解放民は、主人から姓または名をもらうこともあれば、自由な身分を与えるよう推薦してくれた人の名をもらうこともある。この新しい市民は、田舎よりは、あまり土地柄のよくない町に住み着くことになる。解放される時、彼らは神から賜った自由という恩恵の代償として、髪を切られるという<sup>52</sup>。

この新しい階級の人口は、植民地の獲得以来、増加の一途をたどった。このことは、黒人法で禁止されていたにも関わらず、支配階級の白人男性と黒人奴隷の女性の間にも生まれる混血児が増え、さらにその混血児が次世代に受け継がれたことと連動してはいるが、奴隷女性を母親とする混血児が解放民となるには、主人による承認という段階が必要とされるのである。

黒人法第55条は、主人は20歳になると、自らの判断で奴隷を解放してよいと定めている<sup>53</sup>。白人男性の中には、奴隷との間に生まれた自分の子供を自由にしたいと望む気持ちと、解放民という特権階級を広げたくない気持ちの間で揺れていた者もあったという<sup>54</sup>。解放された子供は、生前贈与あるいは遺言により、主人から棒給を受け取ることができた。結婚式の折りに、持参金をもらう例もあったようである。

1770年以降は、ことに解放民の増加の度合いが激しかった。1770年には6000人程度、80年には12000人、そして、サン＝メリーが大著を記した97年には28000人まで達したのは冒頭に書いた通りである。異人種間の公式な婚姻を禁じる黒人法はこの時点では効



力を発していたはずだが、実際、「解放民と奴隷の結婚、または白人と奴隷の結婚がこれほど普及したことはない」とサン=メリーは語っている<sup>55</sup>。主人の側にしてみれば、奴隷の人数が増えることで維持費がかさむのを食い止める必要があったという事情がある。またサン=メリーによれば、1775年に近衛隊、1779年に王立射撃隊の兵士の募集があったことも大きなきっかけだった。隊に加わることを条件に多くの奴隷が解放された上、これを機会にそれまで未調査だった解放民もカウントされることになったのだ<sup>56</sup>。

## 5. 結びにかえて — 黒の拒絶から白の伝播へ

こうして、奴隷貿易の開始直後は、植民者にとっては嫌悪の対象でしかなかった黒人奴隷との交渉から生まれ、18世紀初めは500人にすぎなかった解放民は、サン=ドマングやアンティル諸島の他の植民地においては、ひとつの階級を組織するまでに至った。サン=メリーが情熱を注いだ混血分類表の直接的効用はわれわれの知るところではないが、その分類の特筆すべき詳細さと「科学」を装ったディスクールから、植民地時代という時間の長さ、その中で繰り返された異人種間交渉の具体的痕跡と社会におけるその存在感が読み取れるだろう。だが、読み取れるのはそれだけではない。

サン=メリーの記述は一見ニュートラルを装っているが、はたしてそうではない。分類とは、現実の中にあってはおのずと階層化する。あるものとあるものの間に政治的關係が生まれるのは避けられない。再びバリバールを引けば、分類と階層化は「すぐれて自然化 (naturalisation) の操作である。より正確に言えば、それは歴史的・社会的差異を想像の自然 (nature imaginaire) という領域に投影する操作」である。「人類内部の『自然的差異』の体系によって倍加された『人間的自然 (nature humaine)』は、決して無媒介的なカテゴリーではない。とりわけ人間的自然は必然的に、「結果」ないし症候についても (『人種的特徴』は心理的な

ものであろうと身体的なものであろうと、つねに両性の差異のメタファーである)、『原因』(混血、遺伝)についても、性図式(schèmes sexuels)を含んでいる。だから、どう見ても『純粹』自然のカテゴリーに入らない血統(généalogie)という基準がきわめて重要になるのである<sup>57</sup>。この分類をなしたサン=メリーが法律の専門家だったように、「血統」が相続や地位継承といった事柄に関わる法的な概念でもあることを考えると、この人種の「自然主義」は本来矛盾を抱えたものなのである。矛盾を抱えてはいるが、科学者ではなく法律家であるサン=メリーが血統の問題にここまでこだわるのはありうべきことだといえるだろう。サン=メリーは混血人を細緻に分類することで、白人とそれ以外との間に絶対的な線を引いた。一方で「分類」に添えられたコメントのほうはむしろ個人的見解に基づき、同じ白人でも本国人とは違って植民地に生きた当事者ならではの「父性愛」に満ちている。白人と黒人の交渉から生まれた「混血」の者たちは、完全な「他者」である「純粹な」黒人以上に、白人たちにとっては無視できず、情愛も絡む「身内」なのだ。記述では彼らの生来の善良さとともに欠点も挙げられるが、それは教育の欠如が原因とされる。教育の欠如を語る主体は、件の教育をすでに与えられている、あるいは相手に与えられる者である。

同時にそこには、支配下にある「身内」から脅かされまいとする危機意識を読み取ることも可能である。この新しい階級は白人たちの欲望や意志による行動の結果でもあるが、その無視できない量としての存在感に彼らが脅威を感じたとしても不思議ではない<sup>58</sup>。情愛とも無縁ではない、その複雑な危機感がサン=メリーをして、本国の、すなわち直接の当事者ではない立場にいる科学者には及びもつかない遠大な分類に駆り立て、「科学」を装った混血幻想を作り上げ、白人とそれ以外とのあいだの深い断絶を印象づけることに貢献させようとしたのではないだろうか。

またこの新しい階級に属する者自身、同じ虚構に身を委ね、互いに肌の白さを競うことで、階級のさらなる分化を体現していたようだ。黒い色との交わりを拒むことに始まった植民地の人間の歴史は、世代を経て、白い色の伝播という思想へと取って代わられた。その姿は、植民者たちが次々新たな陸地に自国の旗を立ててきた経緯を肉体をもってなぞっているかのように見える。

時代は、宗教的モラルを拠り所とした黒人法により、混血を作らないという公の歯止めがいまだ存続する一方、国家の軍備増強というやはり公の目的により、混血の奴隷が兵力として求められるという両義的な事態へと突入していた。同時にそれは、宗教の歯止めをもってしても不可避だった有色人との交渉の果てに、膨れ上がった「身内」としての混血児を持てあました植民者の利害とも合致している。本国で起きた大革命の平等思想と直接連動することは叶わず、フランスが国家として奴隷制廃止を認めるにはまだ半世紀を待たなければならなかったが、複数の方面からその期は熟しつつあった。それはまた、一にして不可分な民をもつはずの普遍主義と階層化された人種意識、あるいは外の政治と内なる政治との根深い相反関係が芽吹いた瞬間であったともいえる。

---

#### 参考文献

1. カリブ海グアドループ島出身の作家マリーズ・コンデは、この新しい人々、すなわちアンティルの民を「資本主義システムによる、完全に人工的な創造物」と呼んでいる。Leah D. Hewitt, *Autobiographical Tightropes*, Charlottesville, University of Nebraska Press, 1990
2. Jean Meyer, Jean Tarrade, Annie Rey-goldzeiguer, Jacques Thobie, *Histoire de la France coloniale: Des origines à 1914*, Paris, Armand Colin, 1991, p. 48.
3. <http://palissy.humana.univ-nantes.fr/CETE/TXT/CN/cn1685.html>, art. 44.
4. 一方、白人女性と黒人男性の同衾でできた子供は母親の身分に準じ、解放されることにはなっていたが、こうした関係は法律以上に社会が厳しく禁じており、非常に稀だった。

- 
5. Moreau de Saint-Méry, *Description topographique, physique, civile, politique et historique de la partie française de l'île Saint-Domingue*(1797, aux États-Unis), tome 1, Blanche Maurel et Étienne Taillemite, Paris, Société Française d'Histoire d'Outre-Mer, 1984.
  6. *Ibid.*,p. 28.
  7. *Ibid.*,p. 44.
  8. 工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説』、東京大学出版会、2003年、Aimé Césaire, Toussaint-Louverture, *Présence Africaine*, 1981などを参照。
  9. Saint-Méry, *op. cit.*, p. 91-92.
  10. *Ibid.*, p. 93.
  11. *Dictionary of American Biography*, N.Y., Charles Scribner's Sons, vol. 7, 1962, p. 156-157.
  12. ナポレオンによる制度復活はあるにせよ、サン=メリーの執筆当時、すでに奴隷解放の第一段階はなされており、解放論者の意見も力を得ていた。サン=メリーの記述には、白熱する議論に対する彼のナイーブな逡巡も含まれている。Saint-Méry, *op. cit.*, p. 46.
  13. *Œuvres complètes de Buffon avec les suppléments augmentées de la classification de G.Cuvier*, t. 4, Librairie de l'Encyclopédie de 19 siècles, Paris, 1855, p. 232.
  14. *Ibid.*, ibidem
  15. 呼称はともかく、サン=メリーは別の箇所で「サン=ドマングには1/512しか黒人の血が混じらないサン・メレがいる」と報告してもいる。Moreau de Saint-Méry, *op. cit.*,p.93.
  16. Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du 19e siècle*(1873), t.13-1, Slatkine, Genève-Paris, 1982, p. 597.
  17. Saint-Méry, *op. cit.*, p. 86.
  18. *Ibid.*,p. 100.
  19. *Ibid.*, p. 93. この記述は、サン=メリーが本国発の文献などより、実地での情報、観察をもとに分類を進めていることの、ひとつの手がかりとなる。一方、ラバ神父はその著書『島々への旅』のなかで、新生児は生まれて10ヶ月を経ってからでないと、確実な肌の色を見分けられないとしている。  
(Jean-Baptiste Labat, *Voyage aux Îles*(1722-24), Paris, Phébus, 1993, p. 151.)
  20. Saint-Méry, *op. cit.*,p. 84.
  21. 植民地の白人の中には、プティ・ブランと呼ばれる財産を持たない階層も存在したが、サン=メリーの分類には特に記されていない。

- 
22. Maryse Condé, *La civilisation du Bossalè*, Paris, L'Harmattan, 1978, p. 19.
  23. *Ibid.*, p. 21.
  24. Arlette Gautier, *Les sœurs de Solitude—La condition féminine dans l'esclavage aux Antilles du 17e au 19e siècle*, Éditions Caribéennes, 1985, p. 152-153.
  25. Saint-Méry, *op. cit.*, p. 72.
  26. Condé, *op. cit.*, p. 20.
  27. Louis Sala-Molins, *Le Code Noir ou le calvaire de Canaan*, Paris, PUF, 1987, p. 25. 18世紀の自然科学者デュフォンもまた、黒人の黒さは体内にも及び、その血液は黒いと記している。(Buffon, *op. cit.*, p. 231.)
  28. *Ibid.*, p. 49.
  29. ただし人種間の接触という「問題」が表面化してくる17世紀以前は比較的規制が緩く、混合婚も可能だった。
  30. ちなみに、現在一般的には「白人」「黄色人」といった人種を指すことの多いraceという単語が最初にこの意味で使われたのは1684年、すなわち旧植民地の栄華期であり、黒人法施行とほぼ時期を一にしている。*Le Grand Robert*, t.5, Paris, 2001, p.1519.
  31. Code Noir, 1685, art.9.
  32. Code Noir, 1724, art.6.
  33. サラ・モランはこれを賠償額の増加と見ている。Sala-Molins, *op. cit.*, p. 108.
  34. Yves Chemla, 《Études haïtienne》, [http://homepage.com/chemla/fic\\_doc/syrenn.html](http://homepage.com/chemla/fic_doc/syrenn.html)
  35. Gautier, *op. cit.*, p. 72.
  36. Labat, *op. cit.*, p. 151.
  37. Saint-Méry, *op. cit.*, p. 107.
  38. *Ibid.*, p. 84.
  39. Gautier, *op. cit.*, p. 153-154.
  40. *Ibid.*, p. 154.
  41. Étienne Balibar, Immanuel Wallerstein, *Race, nation, classe*, Paris, Édition La Découverte, 1988, p.71. 『人種、国家、階級』大村書店、1997年、88-89ページ。
  42. Gautier, *op. cit.*, p. 62.
  43. しかし、女性奴隷の値が男性奴隷のそれより高かったわけではない。*Ibid.*, p.212.
  44. Saint-Méry, *op. cit.*, p. 107.
  45. *Ibid.*, p. 61.

- 
46. Larousse, *op. cit.*, t. 9, p. 218.
  47. Saint-Méry, *op. cit.*, p. 108-109.
  48. *Ibid.*, p. 104.
  49. 「服や宝石を増やそうとする好みに加えて、相当な出費の増加を余儀なくしているのは、それらを大事にしようという気遣いの欠落である。こうした贅沢癖のせいで、非常に高価なものさえ大事にされず、まったく無駄な使い方をしたり、すでに何度か身につけたからと捨て去ったりするのである」。 *Ibid.*, p. 106.
  50. *Ibid.*, p. 57-58.
  51. アレホ・カルペンティエル『この世の王国』木村榮一・平田渡訳、水声社、1992年、71ページ。
  52. *L'Encyclopedie ou Dictionnaire raisonne des sciences, des arts et des metiers*, mis en ordre et publié par M. Diderot et par M. D'Alembert, Readex Microprint Corporation, vol. 1, 1969, N.Y., p. 65. しかし、サン=メリーとほぼ同時代に本国で記述されたこの説明が、サン=ドマングという個別の植民地の事情と必ずしも一致していないことは指摘しておかなくてはならない。
  53. Code Noir, <http://palissy.humana.univ-nantes.fr/CETE/TXT/CN/cn1685.html>
  54. Gautier, *op. cit.*, p. 171.
  55. Saint-Méry, *op. cit.*, p. 84-85.
  56. *Ibid.*, p. 85.
  57. Balibar, *op. cit.*, p. 81. 邦訳101ページ。
  58. 実際、当地の白人たちの解放民への扱いは冷酷であり、それゆえこの新階級の者たちが黒人側についたことが、皮肉にも白人たちの望まないハイチ独立へとつながったともいわれている。C.L.R.ジェームズ『ブラック・ジャコバン トゥサン=ルヴェルチュールとハイチ革命』（青木芳夫監訳、大村書店、1991年）参照。